

夜すがら花を守りけむ、

「暮もなからん地の上に」  
花の香薫ゆる春の野を、  
みどりの髪を振り分けて、  
日は麗かに衣をすめて、  
戯れつ纏れる其姿は、  
それよりばらの香かも、  
胡蝶も花とまがふなる、

花 徂

行く春を、  
うらぶれし身ぞさみしけれ、  
君が挿したる床の花、  
紅色豊けき芍薬花、  
もの背黠す我がほとり  
何とはなしに慕はしき、  
人をもしたふ心かも。

床の花

伊勢 吉田 伸子  
偲び音になく五月雨や、  
二句に臥するきのふけふ、  
紫涼し杜若、  
露染立て、生々と  
慰め神のみすがたか、  
花を戀ぬる心こそ

夏草集

雲  
空ゆく雲は何故に、

女子文壇

筆貳巻第九號

新 體 詩

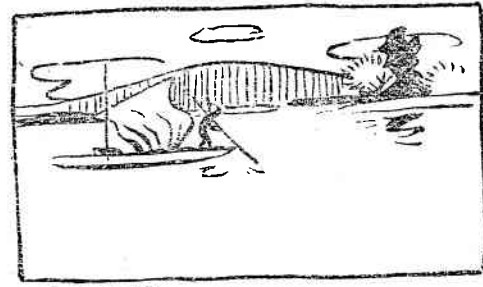
(三二)

聖き影地に落ちて、

その光明こそ欺けれ、  
春の息吹になびきつゝ、  
下にかすめる野や山や、  
荜は野澤に角ぐまむ、  
人新しき生命争く、  
光榮よ希望も歡樂も、  
神の界も遠からじ。

越前 松原 清子

十とせに偲びぬ少女子が、  
いつこを果と通ふらむ  
行手を蝶のさへぎりに、  
春の天使といづれぞや、  
紅もゆるくちびるを、  
少女の夢や神を籠らめ、



我世はなれい久方の、  
冷風捲る夏の夜の、  
空に閃めく稻妻や、  
千年の雲につままれて、  
心澄ませし山人も、

詛ひの神

夕曇の香に酔ひて、  
光をあずに契りつゝ、  
霞める野邊に若菜つみ、  
あはれ委まむ今ははや、  
君が奥津城とめ來れば、  
ゆかしき影には、笑みて、  
あゝ明らけき愛神の  
暗きに入りし君が身の

深山に入りて

長野 飯塚 貞子  
縁樹のあたりとしかこむ、  
路半駒といと細し、  
太古のかけの岩き哉、  
寒みえざる怪鳥なく、  
落ちてあわだつ谷の底、  
神風さやく「莊嚴」と、  
一種の靈氣人を魅す。

紫陽花

夢の行方を逐はむとて、  
露に染みたるうつしなな

小篠に重き紫の、  
奇しきさげびの人たちぬ。

(三三)

女子文壇

第貳巻第九號

新 體 詩

(三二)

おどろく髪五尺、  
紫陽花さして嬉々と笑む、  
あやに亂る黒髪に、  
可笑し手振り微笑みて、  
遠寺鐘の野響きに、  
袖のはふりにさゆらぎて

朝顔

狭き郷人さかしげに、  
脊々のゆめも幸なき、  
去り乍ら残るえにしに、  
あした夕をそすさまに、  
やがてもの色や何なる、  
朝々の人のなぐさめ

夕雲の歌

化粧の料と月宮に、  
散りしと見せて櫻花、

松島

あれ君とめぐります  
朝ぼらけゆくふれの  
かすかにいもせ鳥  
見かへれば絶が島  
のる船はあさ潮に

山

莊嚴の靈遊る、  
朝霞しき嶺を登りて、

眞胸あらはに乳白く、  
霞のまよなる一枝を、  
さらばとわざし與ふれば、  
「夫は彼れに」と明星を指す。  
身をひるがへす狂ひ女の、  
あな亂れたり七蓮花。  
神 戸 し げ 子

物うさのこゝに幾月、  
この宿や疾とく去らん。  
二葉なる苗のころより、  
育くみし垣のあさがほ。  
培ひしぬしはあらずも、  
かならずそよよ色に咲け。  
赤 阪 慈 ぶ さ 子  
運ぶか急ぐ雲のさま、  
そのまゝ浮きし花櫻色、  
岩 代 芳 江 子

春の旅松島に  
日の見ゆる五大堂  
そらになく調きこゆ  
みさは濃き松しげる  
深ふてまた深ふ。  
下 野 新 井 琴 子

淨世をわびて隠者ぶり、  
煩らふ弱き詩人の、  
金輪際根を持てる、  
詩の女神の微笑に、  
天の扉に影りつけて、  
人もや生れむ嗚呼かくて、

春夕

紫の雲ながく垂れて、  
霞は野火の末に遠り、  
眞杉の木立、朱塗りの鐘樓、  
扇、破れ堂の屋根を辭して、  
今野より歸る駄馬、  
さても流れに沿ふて行く我れ、  
燃えいづる草を踏んで、  
芳香四圍にたぐひ風は静かに、  
今無心の歌を春にまればや、

つきかげ

聽る月夜を花蔭に、  
ひらくに難き胸の扉や、  
顔見らるゝを羞らひて、  
君もこなたを向き玉ふ。  
にぎる柔手はあたゝかき、  
はなやぎ頬にもゆるかな。

夕

鐘聲湖水の中に落ちて

空飛ぶ鳩の行方にも  
疾斜を寫す筆焚きて、  
山の麓に埋みなば、  
花の香充ちて鳥唱ひ、  
永久に絶えせぬ美き詩の、  
聖く優しきうまし國。  
岩 代 松 山 蓄 齋

野川のあたり烟起りぬ、  
夕暮れ残る歌は雲雀か、  
幽妙寂びある、聲音趣味、  
星影淡く水に映れり、  
ともしもれづる菓屋三つ四つ、  
思も非じ憂も非じ身は醒し、  
色わかぬ花に坐さんか、  
願くば夢に入らむ、あゝ紫微官、  
ゆるせ口誦む古歌は五百章、  
筑 後 花園 ま さ な

語りむ戀はもゆれども、  
かたへを向けば生憎に、  
香のめぐりあひ、瀧りに  
讀 岐 東 原 董 子

夕日斜に野寺に懸り